

---

## 詩歌・小説の中のはきもの（第4回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

---

38 室伏広治 うちの部室には一本歯の下駄を置いてます。あれは腰の感覚を覚えるのに、すごくいいですよ。いい訓練になる。ほかにも足袋や地下足袋、わらじもそろえてます。

齋藤 孝 下駄は、鼻緒の締まる感じがいいでしょう。

室伏広治 腰につながる感じがすごくあって。

★『五輪の身体』から。アテネオリンピッククハンマー投げのゴールドメダリストと下駄わらじ、草鞋、地下足袋の組み合わせが面白い。「腰につながる」というのは、一つの発見といっていい。靴は足との会話量が少ない。それに比べると下駄とはなんと豊富な対話を楽しめることか。蹴上げれば天気予報までしてくれる。

39 希典の長靴はむかしから軍の制式のものを用いず、かれ好みのものを用いた。膝をすっぽり覆うほどの大きなもので、どこか革具足を連想させるような重いものであった。その長靴でこの白砂の上を踏むと、おもいがけぬほどに大きな音が出た。しかし希典はその音を気にするどころではなかった。

その靴の音を御寝所で帝はききながら、

「乃木が来たな」

と、女官にむかってつぶやいた。

司馬遼太郎

★『殉死』から。乃木は廊下伝いに行くのがまだるこしくて、内庭を横切ったのである。次室から機嫌を奉伺し、退室のときに女官が「お上は、閣下が参られたことをお足音でお聴きわけございました」と告げると、乃木は仰天して、長靴を脱ぎ、両手に抱えて内庭を横切って帰った。女官がそのことを明治天皇に伝えると、はじけるほどにお笑いになり「道理で帰りは足音がなかった」といわれた。乃木は戦場にあっては左右なしの靴を履いていたが、このときはどうだったのだろう。

40 ムゼッタ 脱がせてよ！ひもをといて！こわしちゃって！ひきさいてよ！あなたにお願い……向こうに靴屋があるわ、かけて行って、早く！別の一足を欲しいのよ。ああなんてきゅうくつで、痛くていやな靴なんでしょう。さあ脱ぐわ……（片方の靴を脱いで机の上に置く）ほらここよ。走ってよ、行って、急いで！早く、行って、行って！

ジャコモ・プッチーニ

★歌劇『ラ・ボエーム』から。ムゼッタの計略にまんまと引っかかってアルチンドロ

は靴屋へ駆けて行く。その姿を見ながらムゼッタは、靴を履いた片足でピョンピョン跳ねてマルチェルロのところへ行き、熱烈な抱擁をする。靴は可哀相にもこのように、悪用されることがある。

41 校内の上ばきはワラゾウリと決められていた。…男子の生徒はみな素足にワラゾウリであった。寒いから、冷たいからと、いちいち足袋をはくというわけにはいかなかった。それに足袋そのものも衣料切符の問題があって、そう簡単に手にはいらないという事情もあった。「くつした」などは、兵隊さんのはく軍足以外、どこにもなかった)。それでも、風邪で休んだりしたあとは足袋をはいたが、それがまたみな自家製のものであった。 和田多七郎

★『ぼくら墨ぬり少国民』の「戦争と子どもと教師」から。今、幼稚園などで「はだし」の保育をしたりするところがある。風邪を引かない丈夫な子に育つという成果が報告されている。それを見習って小学校で上履きを草履にしたらいいと思う。学校給食でその土地で収穫された産物を使用する試みがなされて好評なのを聞くにつけ、学校で子供たちに草履を編ませ、それを履かせることを試みたら面白い成果があると思う。

42 日本女性にとって最大の難関は靴であった。男子の靴はすべてローヒールだからさほど抵抗はなかったが、婦人靴は18世紀以来ハイヒールが主流となっていた。これを品よくはきこなして、さっそうと歩くという「技術」は、草履か下

駄しかはいたことのない日本女性には至難のわざであった。膝が曲がっていたり、つま先を内側にする「ハの字形」の歩行など、せっかくの洋装を垢ぬけないものにした。その後、洋装が本格化するにつれて、多くの女性はすっかり靴になじんでいる。 増田家淳

★『きものの生活史』から。膝が伸びず、足をひきずり、しかも「ハの字形」は今でも頻繁に見られる。和服を着ていた伝統が今も身に滲みついているのだろうか。外国の街中を歩く人を眺めていると、かなり離れたところから見ても日本人だと判る。作者は「理由は不明であるが昔の旅行用のわらじは男性専用で、女性は普通の草履を別のひもで足にくくりつけた」と面白い指摘をしている。

43 「さうか、君の家は何処だい。」  
「錦糸堀なの。」  
「商売でもしているの？」  
「さう、靴屋。」  
「靴屋か、ちつとも知らなかつた。」  
「私だつて靴縫ふのよ。年季入れたんですもの。」  
「君が。女で？異（かは）つてるね。」  
「東京に二人あるわ。」 徳田秋聲

★『縮図』から。昭和30年代末、高校や中学校へ女子の現業社員の求人に行くと、どの学校でも、靴を造るどんな作業を女性にさせるのですかと質問された。町中の靴店での手縫い作業しか目にしていなかった人たちには、百数十工程の流れ作業は全く知られていなかった。美術系の大学にデザイナーの求人に行って、就職課員から靴にデザインなんてありますか？と言われたこ

とも何回かある。

44 愛用していると気の合った伴侶といったぐあい、その存在すら忘れるものだ。見慣れたせいで、実際の姿かたちに気づかない。ある日、愕然とする。旅先の宿の玄関に、ポツンとはなれて置かれていた。全体がくたびれて、だらしなく横にひろがっている。色合いも微妙なやつれをみせ、踵がすりへっている。

別れるしおどきである。あり合わせの紙箱に納めて処分する。人間とちがって靴はこの点、いさぎよい。黙々と運命に従い、小さな棺に入って消えていく。

池内 紀

★『遊園地いとこの木馬』から。茶目っ気の多い友人が、従弟の結婚式に行く途中、はいている靴が古ぼけているのに気づいて、デパートで新しい靴を買った。もう少し履こうと古靴を袋に入れてもらったけれど、エスカレーターのところで、結婚式場に持って行くのがいかにも場違いなので気が変わり、屋上の隅へ行って袋から出し、両足揃えて捨てた。急いで現場を離れたとたん、悲鳴が聞えて大騒ぎになったという。

先日、日経歌壇に「靴五足燃えないごみに出され在り不意によみがえるアウシュビッツ 山口健二」という歌を見た。靴は「小さな棺」に入れて捨てるのが正しい捨て方なのかも知れません。

45 重い靴のよさなど、これまで知らなかった。それが、初めてカウボーイ・ブーツを履いてみて、そのすばらしさの虜になってしまった。生まれてこれまで、こんなに歩きやすい靴に出

会ったことがなかった、とさえいえる。…寝る時間になるまで脱ぐ気にならないくらい、足にぴったりしている。…それにしても、女性のための靴はどうして履きにくくつくられているのだろう。

千葉敦子

★『昨日と違う今日を生きる』から。「従容として死につく」などという諦めの美学を拒んで彼女はガンと戦った。亡くなる前に、テキサス州エルパソで作られたものであるという、そんなにもいいカウボーイ・ブーツに出会えたのは彼女にとって最後の仕合せだった。女性の靴の履きにくさに対する彼女の疑問は重く受止めなくてはならない。女性たちよ！自らの履物の選択に関しては決して諦めてはならない。

46 彼女は軽やかで妖精のようだった  
彼女の靴のサイズは9だった

P・モントローズ

★『クレメンタイン』から。「オー・マイ・ダーリン、オー・マイ・ダーリン」のリフレインで有名なアメリカのウェスタンソング。歌詞にバストやウェスト、ヒップならともかく、靴のサイズを詠み込んだことにより実在感が出た珍しい例。サンダルが好きだったという恋人クレメンタインの靴が、26.5センチと知り得たほどに二人は親密な関係だったことがわかる。同時に彼女が妖精としては大柄だったこともわかる。

私は出先で急に注文を受けたとき、有り合わせの紙に鉛筆でお客様のサイズを頂いていた。実家に帰ったときたまたま取った父母の足型は、今や全て空になった両親が遺

した唯一の等身大のものとして、宝になっている。

47 足は柔らかい皮と固い皮で包まれる。柔らかい皮は、たいてい伸び縮みして足によく合うが、固い皮はそうはいかない。この固い皮は、もとは強い獣の皮で、それを固くなってしまいうまで水につけ、刃物でけずり、打ち、日に照らす。この皮で、パパラギは、ちょうど足がはいるくらいの、ふちの高い小さなカヌーを作る。一つのカヌーを右足に、そしてもう一つを左足に。

この足皮は、ひもと鉤ホックとでしっかり足首にしばりつけられ、足は巻貝のからだのように、かたい殻の中にある。パパラギは、この足皮を日の出から日の入りまではき続け、マラガ（旅行）にも行けばダンスもする。たとえスコールのあとのように暑くても、脱ぐことはない。

これはいかにも不自然なことだから、足はもう死にかけて、いやな臭いがしはじめている。実際、ヨーロッパ人の足は、もうものをつかむこともできず、やしの木にだって登ることはできない。だからこそパパラギは、動物の皮を使って、自分の愚かさを隠そうとする。もともと赤い動物の皮にべたべたの脂を塗りたくり、みがいてピカピカに光らせ、がまんできないまぶしさで、人の目を自分の足からそらせようとしているのだ。

ツイアビ

★『パパラギ（岡崎照男訳）』から。サモアの酋長の目を見たパパラギ（白人）の生態。夏のロンドンに行って、バスにもタクシーにも、レストラン、ホテル、有名ブランド小売店にもクーラーがないのを知った

とき、腹が立った。こんな気候の国にして初めて背広にネクタイを締めるのである。ジトジト、ジメジメの日本、この国の服飾デザイナーの何十年にもわたる怠慢は目に余る。私たち靴業界の関係者もツイアビのありのままに物を見る目に学ばなくてはならない。

48 思うに、靴（かのくつ）は今では多く錦でつくる。色は老若によって違いがある。裏の氈を靴氈という。糸で靴の跟（かかと）を繋るのを靴條（くつひも）というが、革でこれをつくったのを靴帯（くつおび）と呼んでいる。天子も、朝賀・小朝拝・節会・内宴などにこれをはく。寺島良安

★『和漢三才図会』から。300年前の日用品を記録している書物。その時代の詩歌、小説にはここまで克明に記述したものはない。クツを意味する漢字は、沓・履・鞆・鞋など私のパソコンの能力ではとても打ち出せないほど数多い。その言葉がどのようにして生まれ、どのような状況の中で文献にあらわれるのか調べている。もっとも、とっかかりの「靴」でもう足踏みしている始末であるが。

49 「これからの民具学は（寸法のない）カット図はダメです」

「いや、物の温かさはカット図がいい」

しかし宮本は数年後、「君の言う通り」と言い、著書『民具学の提唱』（未来社、1979年）では考古学のような実測図の必要性を力説する。

師より先を進んだ実測図の手法だが、必要に迫られて学んだ。20歳のころ、

千葉県で田下駄を調べていたが、現役の道具はもらえない。カメラも買えない。そこで細かく図に描く。写真なら一枚では足りない民具も、図なら一枚でいい。野にある者の知恵だった。

佐田尾信作

★『宮本常一という世界』から。潮田鉄雄と宮本常一の会話である。これまで、私ははきものに関する喜怒哀楽を収録してきたが、ここでは、はきものの「真実」を取り上げておきたい。“調査のプロ”潮田は、履物の実体、更に履物の背後にある生活までを、現場へ行って記録し続けている人である。民間学者の彼の研鑽なかりせば、日本の「民具としてのはきもの」研究はずいぶん貧弱なものであったろう。

50 登山家の今井通子さんが書いておられることだが、ヒマラヤなどでトレッキングをしていると滑りやすい斜面で素晴らしい品質の登山靴を履いたプロの登山家が、往々にして滑ってころんだりするのに、重い荷物を背負った現地のシェルパは絶対に転ばない。不思議に思っているとよく観察していると、滑りかけようとすると反射的に足の指が、ぱっと、一本一本がまるで地面に食いこむようにひろがる、というのである。

五木寛之

★『風の言葉』から。柱に縛られた雪舟は、自分が床に流した涙を足の指で絵にした。小学生の私たちにそれほどの芸はなかったが、授業中に消しゴムやエンピツを床に落とすと足の指でつまみ、拾い上げたり、前の席に座っている級友の尻を足の指でつねるくらいのはした。隠し芸で左足に持っ

た針に右足でつまんだ糸を通す大人もいた。草履を編むときには縄を足の指にかけた。鍬に付いたドロも足の指で拭い落とした。自分が足の指を使って何をしていただったか、何ができたのだったか、直ぐには思い出せないが、いろいろなことに使っていたのは確かである。太平洋戦争中のことである。

51 歩道の端のところに、赤い鼻緒のついた五つか六つぐらいの女の子の下駄が、脱いであった。それは三寸ほどの間隔を置いて、二つ揃っていた。梶井はそれを見て立ちどまった。「これ、女の子がここで泣いたんや。それで親がここから抱いて行ったんや」と大阪弁で言った。なるほど、それにちがいがなかった。人間の状態についての判断がその時生き生きと彼の心の中で働いたのを私は見てとった。

・・・「女の子が泣いた場所で、抱かれて行った。そのあと、夜が来て、暗い路上に、赤い鼻緒の下駄がひっそりと残されている。遠く自動車が走る時、ちょっとだけその鼻緒が照らし出される」というような詩を、作ればつくれるな、と私は思った。

伊藤 整

★『若い詩人の肖像』から。梶井とは梶井基次郎、細密画のような文章を書いたが、夭折した。脱がれた下駄を見た2人の詩人が、それぞれの感性を見せたシーンである。実際脱がれた履物ほどその脱いだ人の心理状態を明瞭に示すものはない。「次の人の履かむよすがに揃へ脱ぐ厠の草履一日の善上林角郎」などという人までいて、履物の脱ぎ様も人によっては尋常なことではない

のである。

52 春おそい北信濃のわが家にポックリ靴がやってきた。長男がガールフレンドを連れてきたのだ。二十二才の彼女は、色白のほっそりとした美人。玄関に28センチの大きな息子の靴と底の厚い可愛い靴が並んでいた。私は子供の頃いつもはいていたポックリをそっくり靴の底につけたようなのでポックリ靴としかいいようがない。

男の子しか育てなかったわが家には、めずらしい若い女性のお客様だ。

松田保子

★『七円の唄 永六輔他編』から。初めて息子が連れてきた女性では、年齢と見た目しか分からない。根ほり葉ほり趣味や家庭状況を聞ける段階ではない。母親はただ玄関に並んだ靴をじっと見る。今まで街中で見たときは少し抵抗感のあった厚底靴を、自分の経験をそっとダブらせて可愛い靴と思うまでに好意をもって眺め、2人の幸せを心中で祈っている。「可愛い」だけでなく、「ありがたい」「うれしい」靴なのだ。

53 洋服というのは、「靴を脱いだ時にまともに見えるか」ということは、全く考えられていないつくりなのだと思います。

たとえば立派な料亭のお座敷に、仕立ての良いスーツを着た紳士がいても、靴下だけしか穿いていない足元を見せようと、間が抜けた感じがする。・・・

その点、和装では履き物を脱いだ時のことがちゃんと考えられています。なにせ、草履や下駄からして、最初から足袋

を外に見せる構造になっている。足袋は、そのまま室内を歩いても全くおかしくない。・・・

そもそもスリッパは、なんのために存在しているのでしょうか。現在の日本では、たいていの人は洋服を着て、家のなかでは靴を脱ぐという生活をしています。靴を脱いで家に上がると、本当は隠されているべき足の部分は、むきだしになります。スリッパというのは、その時の情けない感じを隠すための道具なのです。

酒井順子

★『モノ欲しい女』の「スリッパ」から。こういう見方もある。洋服との関係からの考察はユニークで、しかも説得力がある。西洋人はいったん靴を脱いでベッドに入ったら、翌朝また靴を履くまでの間はスリッパになる。靴とスリッパの補完関係を仔細に調べれば、それがすべてを説明してくれるのだが、小説はそんなことまでは書かない。

54 いちはやく欧米の研究を紹介しつつ論じたのは、森鷗外であった。彼は、衛生学の教科書としてまとめた『衛生新篇』の中の衣服の項で、「衛生上造靴ノ要訣ハ極メテ単純ナリ即チ靴ヲシテ足ニ合ハシメテ足ヲシテ靴ニ合ハシメザルニアリ」と、まことにもっともな見地から、「靴害」の実例を図示し（その中に外反拇趾の図がある）、どのような靴がよいかを論じている。その考察の結果は、日本の足袋が靴としても襪（しとうづ）すなわち靴下としても最良の形であるとする。・・・だが実際には、この衛生的に良いとされた足袋形の靴が（地下足

袋として用いられることもあったが) 一般に普及する結果に至らなかった。

小池三枝

★『服飾の表情』から。学生るとき、金がなくて登山靴が買えず地下足袋を履いて山を歩いていた。あれはまことに具合のよい履物で、忍者感覚、あるいはその山地との一体感、を持てた。また沢を徒渉するとき、いちいち着脱しなくても何の支障もなかった。ただ、行き会う登山者に営林署の関係者と間違われて、道の崩壊箇所を訴えられたり、適当な露营地の場所を尋ねられたりするのには困った。「顔が営林署なんだよ」と仲間から冷やかされたが、営林署の人たちは落ち着きたいかにも山男らしい人が多かったから、私は得意だった。

55 初めてその靴を履いて出かけたなら、夕方から大雨になって靴がびしょ濡れになってしまった。家に帰って紙を中に詰めて水分を取ろうとしたものの、次の日になってもクリーム色にグレーのだんだら模様がしみついてとれない。そのとき突然、今まで忘れていたはずの、五万円という金額が頭の中にうずまいた。一瞬のうちに小心者と化してしまった私は、おろおろして靴を買った店に持っていったが、店員さんは申し訳なさそうに「残念ですがこれは直りませんねえ。こういういい靴はやはり車をお使いになる時に履かれたほうが……」とやんわりいった。

群よう子

★『街角小走り日記』の「一日だけの靴」から。お祝いにもらった腕時計の竜頭が回らなくなったので近くの修理屋に持って行くと、うちでは修理出来ませんという。プ

ラチナと思ったバンドはホワイトゴールドだという。「汗が入ってしまうので、夏にこの時計を使ってはだめですよ」とたしなめられ、銀座の本店に出して7万円の修理代を取られた。“季節限定”のこの時計はその後減多なことでは使わなくなった。生活スタイルに合わないものは、「何の役にも立たない」と群よう子は言う。私は「所有していないのと同じである」と断言する。

56 ちはやっぱり日本人やけん、日本人のごと靴（シューズ）を脱いで暮らす方が気持ちの平かごとあって、タタミとかショージとか、日本の家は全部植物（オールプラント）で、こまか時分から毎日、植物（プラント）を手や足の裏に感じて育ったせいかも知れませぬ。

森 禮子

★『モッキングバードのいる町』から。退職して1年経過して、足に起きた変化の第1は水虫が綺麗に消えたこと、第2は指と指の間が開いてきたこと、第三には小指にあった胼胝たこがなくなったことである。因に東京に出るときを除いて、いつも素足で靴下も着用していない。

指が開くといえ、先日、平成中村座の桜席、つまり定式幕の裏の席から舞台の女形の足を見下ろしていると、どの役者も多かれ少なかれ外反拇趾であった。普段電車の席に座っても股を開けないよう気を配っている人たちなのだから、足に気を配って、靴を履くときにもよほど注意してもらいたいと思った。江戸の女はオールプラントの中で生活していて、外反拇趾なんてあり得なかったのだから。